The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 中古中世散文作品における転換の「サテ」について：接続詞の「サテ」に向かうものとしての |
| Author(s) | 百瀬, みのり |
| Citation | 詞林. 2019, 65, p. 79-102 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/71480 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/71480　　詞林　第65号　2019年4月

# 中古中世散文作品における『転換のサテ』について

## ―接続詞の「サテ」に向かうものとしての―

百瀬　みのり

### 一．序

#### 一．一．はじめに

古代日本語の「サテ」は指示副詞「サ」に接続助詞「テ」が付いた形式を持ち、副詞、接続詞、感動詞などとしてはたらく。副詞としてはたらく「サテ」は、多くは連用修飾語としてはたらき、その場合には、「サテ」の前部に「サテ」が指示する具体的な内容が見られる。（以下、用例は全て『日本古典文学全集』（小学館）から採り、頁数は該当する用例の掲載されている頁を表す。傍線は全て発表者による。傍線は「サテ」、波線は「サテ」の前部にある「サテ」が指示する具体的な内容を指す。）

（1）男の童の、ことなることなき、草木どもにたずみありきて、さて、言ふやうは、「この木に、すべて、いくらもありくは、いとをかしきものかな」と。（『堤中納言物語』「虫めづる姫君」、四一五頁）

（2）また、この男、正月のついたちの日、雨のいたう降りて、ながめゐたるに、友だちのもとより、かくぞいひたる。（歌）春雨にふりかはりゆくとしつきの年のつもりや老いになるらむ　さて、その友だちの久しく訪れねば、（『平中物語』五段、四六四頁）

（3）夜は安きいも寝ず、闇の夜にいでても、穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。さる時よりなむ、「よばひ」とはいひける。人の物ともせぬ所に（略）それよりなむ、すこしうれしきことをば、「かひあり」とはいひける。さて、かぐや姫のかたちの、世に似ずめでたきことを、帝聞しめして、（『竹取物語』、五六頁）

（4）『改まざるものは心なり』とのたまへば、「さて『はばかりなし』とは、何を言ふにか」とあやしがれば、（『枕草子』第四七段、一〇六頁）

これらを踏まえ、古代語の「サテ」の意味機能を明らかにすべく、本論では上記のような副詞としてはたらく「サテ」とは異なる、「サテ」の前部に「サテ」が指示する具体的な内容が見られず、その前後部で話題が変わる位置に現れる「サテ」に注目して、このような「サテ」を『差し込みのサテ』と名付ける。調査によれば、この『差し込みのサテ』は話題接続詞的用法を以てはたらくものと、感動詞的用法を以てはたらくものとがあり、後者については百瀬（二〇一八b）で既に論じたことから、本論では前者の接続詞的用法を以てはたらく「サテ」について注目し、このような「サテ」を『転換のサテ』として取り上げて考察する。具体的には、このような『転換のサテ』が古典散文作品において、その前部までの内容を承けつつ、文脈を一旦切る位置、つまり文頭に置かれ、新たな物語、章段、話題などの始まりを示し、話の場[1]を転換させる機能をもってはたらいていること、中古の対話文、消息文から既に見られてはいたが、中世の対話文、消息文にまとまって見られるようになったことについて述べたい。

## 一．二．先行研究と問題の所在

古典語の「サテ」の転換の用法を扱った先行研究には西田（2001）や岡﨑（2008）などがある。西田（2001）は『源氏物語』の「サテ」について転換の用法を以てはたらく例は地の文には見えず会話文には使用されていたと述べ、岡﨑（2008）は（発表者注：「サテ」の転換の用法を以てはたらく例は）地の文でも会話文でも見られたと述べており、両者の主張は異なる。このため、これについては両者が各々の論中で用いる「転換」の意味について確認し、その意味を改めて定義する必要があると考えられる。また、両者とも「サテ」の副詞的用法、接続詞的用法、感動詞的用法の三用法の通時的な変化について論じてはいるが、なぜそのような用法の変化が起こったかについては特に述べていない。

そこで本論では、①古典散文作品中の「サテ」の用例中における『転換のサテ』の位置付け。②『転換のサテ』が発生した経緯。この二点について述べて先行研究を補うこととする。

## 二．考察『差し込みのサテ』について

### 二．一．「サテ」の用例数

まず、古典散文作品中の「サテ」の用例数を確認する。（表一）は本発表で資料とした中古の、（表二）は同中世の古典散文作品に見られる「サテ」の用例数である。用例は「サテ」が現れる文中の位置の別により、【地の文・文頭】、【地の文・文中】、【非地の文・文頭】、【非地の文・文中】の別に示す。ここで【非地の文】とは、【対話文】、【心内話文】【消息文】を指すものとする。

（表一）中古散文作品中の「サテ」の用例数

| 位置／資料 | 地の文・文頭 | 地の文・文中 | 非地の文・文頭 | 非地の文・文中 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 『大和』 | 38 | 0 | 1 | 0 | 39 |
| 『平中』 | 35 | 5 | 4 | 0 | 44 |
| 『落窪』 | 4 | 1 | 16 | 3 | 24 |
| 『枕』 | 27 | 7 | 8 | 2 | 44 |
| 『源氏』 | 17 | 11 | 39 | 36 | 103 |
| 『堤』 | 0 | 1 | 5 | 0 | 6 |
| 『浜松』 | 2 | 1 | 4 | 5 | 12 |
| 計 | 123 | 26 | 77 | 46 | 272 |

（表二）中世散文作品中の「サテ」の用例数

| 位置／資料 | 地の文・文頭 | 地の文・文中 | 非地の文・文頭 | 非地の文・文中 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 『住吉』 | 28 | 0 | 3 | 2 | 33 |
| 『とりかへ』 | 0 | 1 | 4 | 11 | 16 |
| 『保元』 | 0 | 0 | 4 | 3 | 7 |
| 『平治』 | 4 | 0 | 1 | 0 | 5 |
| 『平家覚一』 | 29 | 1 | 34 | 5 | 69 |
| 『平家天草』 | 44 | 3 | 27 | 2 | 76 |
| 『狂言集』 | 0 | 0 | 92 | 1 | 93 |
| 計 | 105 | 5 | 165 | 24 | 299 |

資料名は表中では略して示し、『大和』は『大和物語』、『平中』は『平中物語』、『落窪』は『落窪物語』、『枕』は『枕草子』、『源氏』は『源氏物語』、『堤』は『堤中納言物語』、『浜松』は『浜松中納言物語』、『住吉』は『住吉物語』、『とりかへ』は『とりかへばや物語』、『保元』は『保元物語』、『平治』は『平治物語』、『平家覚一』は『平家物語』・覚一本、『平家天草』は『天草版平家物語』、『狂言』は『狂言集』を指す。（以下同。）

また、本論の用例は「サテ」に注目するもので、「サテハ」、「サテモ」、「サテゾ」、「サテナム」、「サテコソ」などの「サテ」に副助詞、係助詞が付いた形式は考察の対象に含めないものとする。

## 二．二．「サテ」の分類

ここでまず「サテ」の用例について確認しておく。本論では、古典散文作品中の「サテ」を以下のように分類する。

**①．「サテ」前部に、その実態が語的・**

**文的な要素として文中に示されている対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。（ここでは文中に示されている対象の部分に、波線を付して示す。以下同。）**

**①―A．文中に置かれる「サテ」。**

（5）「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」（『枕草子』第二七四段、四二五頁）

（6）さて少将わ今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども、都に待つ人どもも、心もとなうござらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者にいとまごいをして、泣く泣くそこをたたれた．草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：されどもさてあらうずることでなければ、そこをたって同じ三月の十九日に少将わ鳥羽え明かうつかれた．（『天草版平家物語』巻第一・第十一、七九頁）

この「サテ」は副詞のようにはたらく。

**①―B1．文頭に置かれる「サテ」。（この「文頭」とは、話者が交替する対話文の文頭以外の文頭を指す。）**

（7）「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」（『落窪物語』巻之一、九三頁）

（8）「此神輿かきかへし奉れや」と僉議しければ、数千人の大衆、先陣より後陣まで、皆、尤々とぞ同じける。さて神輿を先立て参らせて、東の陣頭、待賢門より入れ奉らむとしければ、（『平家物語』覚一本、巻第一・神輿振、八七頁）

この「サテ」も副詞のようにはたらく。

**①―B2．話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」。（『引き取りのサテ』[2]。）**

（9）「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへりけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。（『大和物語』一五八段、三九四頁）

（10）「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひ給へば、「春日大明神の御鳥井なり」と申す。人多く群集したり。其中に法師の頸を、一つさしあげたり。「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、（『平家物語』覚一本、巻第三・無文、二三二頁）

この「サテ」も副詞のようにはたらくが、特に対話の話者の交替を表すマーカー（談話標識）としての機能を示す。

**②．「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められない「サテ」。（『差し込みのサテ』。）**

**②―A．その前部までの内容を承けつつ、文脈を一旦切る位置、つまり文頭に置かれ、新たな物語、章段、話題などの始まりを示し、話の場を転換させる機能をもってはたらく「サテ」。（『転換のサテ』。）**

（11）女、（歌）なぎさなる袖まで潮は満ち来とも葦火たく屋しあれば干ぬらむ　などなむ、いひおこせたりける。さりければ、久しくも長居で、帰り来にけり。〈ここまで三五段。〉さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。（『平中物語』三六段、五二二頁〈これは三六段の冒頭に置かれた「サテ」の例。〉）

（12）「侍共に矢一つ射かけ候はん」と申しければ、「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扨小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。（『平家物語』覚一本、巻第七・一門都落、八三頁）

この「サテ」は、文頭に置かれ、接続詞のような機能を示す。

**②―B．感動詞のようにはたらく「サテ」。**

この「サテ」は「さてさて」、「これはさて」、「さていかにせむ」、「まずはさて」、「さてこれわ」、「さてこれは」、「何がさて」などの連語の形式をとることもあり、文中で感動詞などとしてはたらく。

（13）「男しもなむ仔細なきもののはべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。（『源氏物語』帚木、八六頁）

（14）波多野、「尤もさこそ候はめ」とて、太刀を抜き、引きそばめて、近付きければ、少き者ども、太刀の影に驚きて、「これは、さて、実に失はんずるにや。暫し助けよや」とて、（『保元物語』下、義朝幼少の弟悉く失はるる事、三五七頁）

この「サテ」は、感動詞のような機能を示す。

分類の結果を（表三）、（表四）に示す。

（※1）「地頭」は【地の文・文頭】、「地中」は【地の文・文中】、「対頭」は【対話文・文頭】、「対中」は【対話文・文中】、「心頭」は【心内話文・文頭】、「心中」は【心内話文・文中】、「手頭」は【消息文・文頭】、「手中」は【消息文・文中】を指すものとする。

（※2）草子地・文頭の1例を含む。

（※3）「さてさて」1例を指す。

（※4）「これはさて」1例。

（※5）「さていかにせむ」1例。

（※6）「さてさて」6例、「さてこれわ」1例。

（※7）「まずはさて」1例、「これはさて」1例。

（表三）・中古の「サテ」の分類

| 分<br>類<br>資料 | ① | | | ② | |
|---|---|---|---|---|---|
| | A | B | | A | B |
| | | 1 | 2 | | |
| 『大和』<br>全38例 | | 36　地頭<br>（※１）（※２） | 1　対頭 | 1　地頭 | |
| 『平中』<br>全42例 | 1　地頭<br>3　地中 | 32　地頭<br>1　地中<br>1　対頭 | 3　対頭 | 1　地頭 | |
| 『落窪』<br>全25例 | 1　地中<br>2　対中 | 2　地頭<br>7　対頭<br>1　手頭 | 7　対頭 | 2　地頭<br>1　手頭 | 1　対頭<br>1　対中 |
| 『枕』<br>全45例 | 8　地中<br>1　対中 | 27　地頭<br>1　対頭<br>1　対中 | 6　対頭 | | 1　対頭 |
| 『源氏』<br>全104例 | 11　地中<br>1　対頭<br>18　対中<br>18　心中 | 17　地頭<br>21　対頭<br>2　心頭 | 12　対頭 | 3　対頭 | 1　対頭<br>（※３） |
| 『堤』<br>例６例 | 1　地中 | 3　対頭 | 2　対頭 | | |
| 『浜松』<br>全12例 | 1　地中<br>2　対中<br>3　心中 | 1　地頭<br>1　対頭<br>2　手頭 | | 1　地頭 | 1　対頭 |
| 計 | 71 | 156 | 31 | 9 | 5 |
| 合計 | 272 | | | | |

（表四）・中世の「サテ」の分類

| 類<br>資料 ＼ 分 | ① | | | ② | |
|---|---|---|---|---|---|
| | A | B | | A | B |
| | | 1 | 2 | | |
| 『住吉』<br>全32例 | 2　対中 | 25　地頭 | 3　対頭 | 2　地頭 | |
| 『とりかへ』<br>全16例 | 1　地中<br>6　対中<br>5　心中 | 2　対頭 | 1　対頭 | | 1　対頭 |
| 『保元』<br>全６例 | 1　対中<br>1　心中 | 1　心頭 | | 1　対頭 | 1　対頭<br>1　対中<br>（※４） |
| 『平治』<br>全５例 | | 4　地頭 | | | 1　対頭<br>（※５） |
| 『平家覚一』<br>全69例 | 1　地頭<br>1　地中<br>2　対頭<br>5　対中 | 27　地頭<br>11　対頭 | 12　対頭 | 10　対頭 | |
| 『平家天草』<br>全88例 | 5　地中<br>1　対頭<br>1　対中 | 43　地頭<br>11　対頭 | 9　対頭 | 2　地頭<br>7　対頭 | 7　対頭<br>（※６）<br>2　対中<br>（※７） |
| 『狂言集』<br>全237例 | | 41　対頭<br>1　対中 | 68　対頭 | 13　対頭 | 89　対頭<br>（※８）<br>25　対中<br>（※９） |
| 計 | 32 | 166 | 93 | 35 | 127 |
| 合計 | 453 | | | | |

（※8）「さてこれは」3例、「さてさて」86例。
（※9）「何がさて」24例、「さのみ恐ろしいものでもないわ、さて。」1例。

（表三）、（表四）を踏まえ、本論では二．二．において②—A．に分類された、『転換のサテ』を考察対象とする。

## 二．三．『転換のサテ』について

### 二．三．一．『転換のサテ』の用例の出現状況

（表三）、（表四）で『転換のサテ』（②—A．）に分類された用例を示す。（表三）・中古で『転換のサテ』に分類された例は全九例である。まず中古の『転換のサテ』の出現状況を示す。

用例を示す。

［地の文の例］（文頭「サテ」五例）

（15）おなじ人に、監の命婦、山ももをやりたりければ、（歌）みちのくの安達の山ももろともにこえばわかれの悲しからじを　となむいひける。さて、堤なる家になむすみける。（『大和物語』七十段、三〇〇頁）

（16）供なる人に、（歌）うぐひすの声のはつかに聞ゆるはいづれの山になく山彦ぞ　とぞ、口遊びにいひける。〈ここまで六段。〉さて、この男、志賀寺にまうでて、二月に行ひけり。（『平中物語』七段、四六五頁〈これは段頭の例。〉）

（17）よき帛、糸、綾、茜、蘇芳、紅など、多く奉りたまへれば、もとよりよくしたまへりけることなれば、急がせたまふ。さて、少将の君につきたてまつりて、馬允になりたる田舎の人の徳ある、絹五十まゐらせたれば、人びとにさまざま賜はす。（『落窪物語』巻之二、一六七頁）

（18）笛、いとうつくしと思す。音もかしこし。さて、殿へ夜更けてわたりたまふ。（『落窪物語』巻之三、二六八頁

（19）さて式部卿の宮は東宮うせ給ひぬれば、疑ひなき儲けの君に定まり給ふべきを、「心にまかせたる御里住みにて、」（『浜松中納言物語』巻第五、四〇〇頁）

［対話文、消息文の例］（文頭「サテ」四例）

（20）少将の御許より御文あり。「いか

（表五）中古『転換のサテ』の出現状況

| 用例出現位置 | 地の文・文頭 | 地の文・文中 | 対話文、消息文・文頭 | 対話文、消息文・文中 |
|---|---|---|---|---|
| 用例数 | 5 | 0 | 4 | 0 |
| 用例数計 | 5 | | 4 | |
| | 9 | | | |

にぞ。昨夜の縫ひさし物は。腹まだ立ち出でずや。いと聞かまほしくこそ。さて笛忘れて来にけり。取りて賜へ。」（『落窪物語』巻之一、九八頁）〈これは消息文の例。〉

（21）「なにがしが及ぶべきほどならねば、上が上はうちおきはべりぬ。さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の」（『源氏物語』箒木、六〇頁）〈対話文の例。〉

（22）「ものの例に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、」（『源氏物語』夕霧、四七一頁）〈対話文の例。〉

（23）かの御忌日の経仏のことなどのたまふ。「さて、ここに時々ものするにつけても、かひなきことの安からずおぼゆるがいと益なきを、」（『源氏物語』宿木、四五五頁）〈対話文の例。〉

次に中世の『転換のサテ』の出現状況を示す。用例を示す。

［地の文の例］（文頭「サテ」四例）

（24）中の君も世にたぐひなきことにおぼしけれども、この姫君はなほ、たとへん方なくぞおぼしける。さて、姫君の乳母子に、侍従と申す女房あり。（『住吉物語』上巻、二一頁）

（25）姫君は西の対に住ませたまへば、中の君、三の君など遊びつつ、たがひにむつましく思ひて、明かし暮らしたまひける。さて、右大臣にておはしける人の御子に、四位の少将とて、世にすぐれたる人おはしける。（『住吉物語』上巻、二二頁）

（26）麓にわ雨が繁うて，一日片時も人の命絶えてあらうずるやうもなかった．さて成親卿わ少しくつろぐこともあらうかと思われたところに，子息少将もはや鬼界が島え流されたと聞かるれば，（『天草版平家物語』巻第一、六〇頁）

（27）すでに源氏に同心しょうずると返事をしたれば，その儀を改むるに及ばいで，みなこれを許容つかまつらなんだ．さて肥後の守と言うものを西国えくだされてあったが，これわ鎮西の謀叛を平げて，（『天草版平家物語』巻第三、一七七頁）

［対話文、消息文の例］（文頭「サテ」三一例）

（28）家弘も出家せんとしけるを、「汝

（表六）中世『転換のサテ』の出現状況

| 用例出現位置 | 地の文・文頭 | 地の文・文中 | 対話文、消息文・文頭 | 対話文、消息文・文中 |
|---|---|---|---|---|
| 用例数 | 4 | 0 | 31 | 0 |
| 用例数計 | 4 | | 31 | |
| | 35 | | | |

出家しては、いとど罪深かりぬと思ゆるぞ」と仰せ言ありければ、しばらくは髪も切らざりけり。「さて、いづちへかわたらせたまふべき」と申せば、（『保元物語』中　新院御出家の事、三一七頁）〈対話文の例。〉

(29) 刀をば、紫宸殿の御後にして、かたへの殿上人の見られける所にて、主殿司を召して、預け置きてぞ出でられける。家貞待ちうけ奉ッて、「さて、いかが候ひつる」と申しければ、（『覚一本平家物語』巻第一　殿上闇討、二三頁）〈対話文の例。〉

(30) 少将まちうけ奉ッて、「さていかが候ひつる」と申されければ、「入道あまりに腹をたてて、教盛には終に対面もし給はず。」（『覚一本平家物語』巻第二　少将乞請、一二九頁）〈対話文の例。〉

(31) 「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扨小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ　御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。（『覚一本平家物語』巻第七　一門都落、八三頁）〈対話文の例。〉

(32) されどもあまりにかなしくて、つつむにたへぬ涙のみしげかりければ、よその人目もおそろしさに、いそぎ大覚寺へぞ参りける。北の方、「さていかにやいかに」と問ひ給へば、（『覚一本平家物語』巻第十　首渡、二五九頁）〈対話文の例。〉

(33) 使四五日候ひて暇申す。北の方泣く〳〵御返事書き給ふ。若公姫君筆をそめて、「さて父御前の御返事は、何と申すべきやらん」と問ひ給へば、「ただともかうも、わ御前たちの思はんやうに申すべし」とこそ宣ひけれ。（『覚一本平家物語』巻第十、首渡、二六一頁）〈対話文の例。〉

(34) 夏過ぎ秋にもなりぬ。七月の末にかの使かへりきたれり。北の方、「さていかにやいかに」と問ひ給へば、「『過ぎ候ひし三月十五日の暁、八島を御出で候ひて、』」（『覚一本平家物語』巻第十　三日平氏、三二四頁）〈対話文の例。〉

(35) 義盛、「舌のやはらかなるままに、君の御事な申しそ。さてわ人どもは、砥浪山のいくさにおひおとされ、からき命いきて北陸道にさまよひ、乞食して泣く〳〵京へのぼりたりし者か」とぞ申しける。（『覚一本平家物語』巻第十一　嗣信最期、三五一頁）〈対話文の例。〉

(36) やがて田内左衛門をば、物具召されて、伊勢三郎に預けらる。「さてあの勢どもはいかに」と宣へば、「遠国の者どもは、誰を誰とか思ひ参らせ候べき。」（『覚一本平家物語』巻第十一　志度合戦、三六八頁）〈対話文の例。〉

(37) かた時もはなれ給はず。しかるをいくさやぶれて後は、けふぞたがひに見給ひける。河越小太郎、判官の御まへに参ッて、「さて若公の御事をば、なにと御ぱからひ候やらん」と申しければ、「鎌倉まで具し奉るに及ばず。」（『覚一本平家物語』巻第十一副将被斬、四一二頁）〈対話文の例。〉

(38) 限あれば、鶏人暁をとなへて夜も明けぬ。斎藤六帰り参りたり。「さていかにやいかに」と問ひ給へば、「唯今まで

は別の御事も候はず。御文の候」とて取りいだいて奉る。（『覚一本平家物語』巻第十二　六代、四六六頁）〈対話文の例。〉

(39) この郎等の家貞待ちうけて，さていかがござったぞと申したれば，忠盛その様態を知らせたう思われたれども，（『天草版平家物語』巻第一、六頁）〈対話文の例。〉

(40) 少将わ待ち受け奉って，さてなにとござるぞと，申されたれば：清盛あまりに腹をたてて，（『天草版平家物語』巻第一、四〇頁）〈対話文の例。〉

(41) 宗盛この人々をを見つけあってから，ちっと力づいて，よにも嬉しさうにして，さて今までわなぜにをそかったぞとあったれば，維盛そのをことでござる：（『天草版平家物語』巻第三、一九〇頁）〈対話文の例。〉

(42) 親家を召して，さて屋島の城の様体わ何とあるぞ？そのをことぢゃ：（『天草版平家物語』巻第四、三三一頁）〈対話文の例。〉

(43) 六日の夜河越義経に参って申したわ：さてあの若君をばなにとつかまつらうぞ？　義経当時暑い中にいとけないもの引き具して，関東まで下るに及ばぬ：（『天草版平家物語』巻第四、三五八頁）〈対話文の例。〉

(44) 北の方さればよくわ，さきに人をも上せられうが，ただ悪しゅうてこそ遅うわあるらう：さて失われうずる有様かと仰せらるれば：そのをことぢゃ：（『天草版平家物語』巻第四、三八九頁）〈対話文の例。〉

(45) 念仏を申すもござり，そばに向いて涙ぐむ者もござると申せば：さて六代わなんとあるぞと，仰せらるれば：（『天草版平家物語』巻第四、三八九頁）〈対話文の例。〉

(46) 太郎「まことに、末広がりになってござる。さてこれには、ちと好みがござる。すっぱ「それはまた如何様なお好みぢゃ。（『狂言集』「末広かり」、二六頁）〈対話文の例。〉

(47) 参詣一「いかにも、今が帰るさでおりゃる。さて今日はそなた一人ぢゃが、お内儀は何と召されたぞ。（『狂言集』「栗隈神明」、五九頁）〈対話文の例。〉

(48) 参詣一「これへくれさしめ。さて太郎、ちとそなたに尋ぬることがおりゃる。（『狂言集』「栗隈神明」、五九頁）〈対話文の例。〉

(49) 粟田口「ハハア、お声からしてお大名さうにござる。太郎「クワーッとしたお大名ぢゃ。さて頼うだお方仰せらるるには、『はるばるのところ大儀にこそあれ。さうあらば、ここに粟田口の書いた物がある。（『狂言集』「粟田口」、七六頁）〈対話文の例。〉

(50) 大名「何しに忘るるものでござらうぞ。真実暇がなさに無沙汰致いてござる。さて、そなたも喜うで下されい。内々の訴訟のことも思ひのままに相叶ひ、安堵の御教書賜り、（『狂言集』「墨塗」、一三二頁）〈対話文の例。〉

(51) 太郎「わざと案内を乞うたことぢゃ。武悪「それはいつもながら、念の入ったことぢゃ。さて早速問はうは、頼う

だお方の御機嫌は何とぢゃ。（『狂言集』「武悪」、一四七頁）〈対話文の例。〉

（52）次郎「次第次第ににぎやかになった。太郎「その通りぢゃ。さて、身共も一つ受け持ったほどに、そなたも何ぞ肴をさしめ。（『狂言集』「棒縛」、二五一頁）〈対話文の例。〉

（53）聟「もしお客ばしござらうかと存じ、わざと案内を乞うたことでござる。教え手「それはいつもながら念の入ったことぢゃ。さてそなたは、今日はいつにないきらびやかな出立でおりゃるの。（『狂言集』「雞聟」、二七七頁）〈対話文の例。〉

（54）聟「別に用はござらぬ。早う出いて下されい。船頭「心得ました。エーイエーイ。エーイエーイ。さて、こなたはどれへござるぞ。（『狂言集』「船渡聟」、二八八頁）〈対話文の例。〉

（55）聟「いかにも、念を入れて詰めさせてござる。船頭「エーイエーイ。エーイエーイ。さて、何と今日は寒いことではござらぬか。（『狂言集』「船渡聟」、二八八頁）〈対話文の例。〉

（56）聟「さだめてさうでござらう。船頭「エーイエーイ。エーイエーイ。さて、近頃申し兼ねましたことではござるが、その小竹筒を一つ振舞うては下されませぬか。（『狂言集』「船渡聟」、二八九頁）〈対話文の例。〉

（57）甲「もしお客ばしござらうかと存じ、わざと案内を乞うたことでござる。乙「それはいつもながら、念の入ったことぢゃ。さてそなたには、もはや日も暮れに及うだに、何と思うておりゃったぞ。（『狂言集』「吹取」、三二六頁）〈対話文の例。〉

（58）出家「さのみくたびれも致しませぬ。檀那「それは何よりでござる。さて只今一飯を申しつけましたによって、程なう出来ませう。（『狂言集』「魚説経」、四一三頁）〈対話文の例。〉

中古では地の文（五例）でも対話文、消息文でも（四例）他の用法より少数しか例が見られなかった『転換のサテ』は、中世には対話文、消息文でより見られるようになった（三一例）ことが分かる。これより、中世において主に対話文、消息文で『転換のサテ』の用法は発達したことが分かる。（中世地の文では四例見られた。）

ここで、中古の消息文に見られた（20）の例に着目したい。中古から、非地の文の例の中で対話文ではなく消息文という環境に現れているこのような例が、『転換のサテ』から接続詞のサテに発展したのではないかと考えられるためである。消息文は書記言語であるという点では地の文との類似点があると考えられるが、口頭発話を写したという点では対話文との類似点があると考えられる。しかし、消息文はその資料中の話の筋によって出現の有無が決まるものであるため、次項では消息文が資料中にまとまった数で見られる『うつほ物語』を参考資料として扱うこととし、その中での消息文に見られる『転換のサテ』について考えることとしたい。

二．三．二．消息文中の『転換のサテ』

（表七）は『うつほ物語』中に見られる「サテ」の用例数である。

※「サテハ」、「サテモ」、「サテコソ」などの「サテ」に助詞等が付いた形は除く。（以下同。）

次に（表八）を元に、各分類項目別に「サテ」の出現環境別の用例数を示す。

（表八）から、②―A．に分類される「サテ」の出現環境は［対話文・文頭］と［消息文・文頭］に集中しており、特に［消息文・文頭］に現れる例が多いことが分かる。それらの用例を挙げる。以下の書簡文の例については、「サテ」部に太傍線を、書簡と共に送られた品物などについての言及部に細傍線を引いて示す。傍線は全て発表者による。

［消息文・文頭の例］

（59）しこぶちに古めきたる箱二つに、東絹一箱、遠江綾一箱入れて、肌荒く強き中紙にかく書きて奉れたまふ。（消息）人知れぬ宮仕へは年経ぬれど、（略）必ず御かへりみ蒙らむ。さてこれはいとなけれど、御方の下仕へらにも賜はせよとてなむ。宮内に銭取らせて帰したまふ。（「祭の使」、四八三頁）〈三春高基からあて宮への消息。〉

（60）「少将にいはむ」とて、少将にのたまふ。「いと易きことなり」とて、よみて奉りたまふ。よき色紙に書きたまふ。（消息）日ごろ、仲立ちなむ怠らず聞こえしむるを、（略）嘆き申す。さてかかることは、若々しければ、若き男どものにぎはしむるを、音に聞くに。とて、（歌）君恋ふとみなかみ白くなるたきは老いの涙の積もるなるべし　絹、綾、禄に取らせて帰しつ。（「祭の使」、四八五頁）〈滋野真菅（実は子息の少将の代筆の消息と、代作の歌）からあて宮への消息。〉

（61）また、北のおとどより、蒔絵の御衣櫃五掛、蘇枋の台、朸二つして、衣二掛、唐綾の類二掛、裏衣一つ、丁子一つ入れて、大宮の御文、尚侍のおとどの御もとに、（消息）近くものしたまひつるほどに（略）蓬莱といふなるところは近かりけると思ふ。さてこれは、留守の人々に賜へとて。などあり。（「蔵開　上」、391頁）〈大宮から尚侍への消息。〉

（62）北の方、大宮の御返り聞こえたまふ。（消息）かしこまりて承りぬ。（略）今むつかしきまでなむ参り来べき。さてこれは、宿守り望む人多く侍るべかめる。（「蔵開　上」、三九四頁）〈北の方（俊蔭女）から大宮への消息。〉

（63）靫負の乳母といふがもとに、御文遣はす。（消息）日ごろ、もの騒がしくて、聞こえずなりにけれ。（略）さてこれは、子持ちの御残りものなり。いと寒き頃なめるを、風邪をやらひたまへとてなむ。（略）とて、乳母のもとには、沈の高坏を五つ、白銀の壺の小さきに黒方入れ、蜜入れたる黄金の蒜

（表七）『うつほ物語』に見られる「サテ」の用例数

| | 俊蔭 | 藤原の君 | 忠こそ | 春日詣 | 嵯峨の院 | 吹上・上 | 祭の使 | 吹上・下 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ①―A. | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| ①―B１. | 3 | 3 | 4 | 1 | 10 | 2 | 1 | 1 |
| ①―B２. | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ②―A. | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 0 |
| ②―B. | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 5 | 5 | 6 | 2 | 11 | 3 | 3 | 1 |

| | 菊の宴 | 内侍のかみ | 沖つ白波 | 蔵開・上 | 蔵開・中 | 蔵開・下 | 国譲・上 | 国譲・中 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ①―A. | 0 | 9 | 0 | 2 | 1 | 1 | 3 | 5 |
| ①―B１. | 3 | 9 | 2 | 16 | 9 | 5 | 13 | 2 |
| ①―B２. | 0 | 1 | 0 | 2 | 4 | 2 | 2 | 4 |
| ②―A. | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 2 | 3 | 7 |
| ②―B. | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 3 | 19 | 2 | 23 | 14 | 10 | 21 | 18 |

| | 国譲・下 | 楼の上・上 | 楼の上・下 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| ①―A. | 3 | 2 | 1 | 32 |
| ①―B１. | 3 | 4 | 1 | 92 |
| ①―B２. | 0 | 3 | 3 | 21 |
| ②―A. | 1 | 1 | 2 | 24 |
| ②―B. | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 計 | 7 | 10 | 7 | 170 |

（表八）『うつほ物語』中の、各分類項目別に「サテ」の出現環境別の用例数

| | 地の文・文頭 | 地の文・文中 | 対話文・文頭 | 対話文・文中 | 心内話文・文頭 | 心内話文・文中 | 消息文・文頭 | 消息文・文中 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ①―A. | 0 | 7 | 0 | 20 | 0 | 4 | 0 | 1 | 32 |
| ①―B１. | 33 | 0 | 52 | 0 | 1 | 0 | 6 | 0 | 92 |
| ①―B２. | 0 | 0 | 21 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 21 |
| ②―A. | 0 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 18 | 0 | 24 |
| ②―B. | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 計 | 33 | 7 | 80 | 20 | 1 | 4 | 24 | 1 | 170 |

五つばかり、沈の寄せ切りたりし、紙に一包、青き色紙どもに包みて、五葉につけて奉りたまへれば、（「蔵開　上」三九五頁）〈仁寿殿女御から靫負の乳母への消息。〉

（64）大将、三条殿に、米一石と炭二荷奉りたまふ。（略）（消息）一日は、ことごとに思ひたまへしかど、（略）いづ方にもいづ方にも、むつましき筋にを。さてこの炭は、水尾に見比べたまへとてなむ。（略）見るに、炭、旅籠をいと細かに組みて、外に小簀を貫き立てて、銭二十貫一籠に入れて、もの覆ひて結ひたり。米は、絓糸、俵に編みて、絹五十疋、俵に入れて三俵、今一つには、いみじくうるはしき綿二十入れたり。（「蔵開　下」、五六六頁）〈仲忠から仲頼の妹への消息。〉

（65）いとうつくしげなる白絹どもなり。（略）車の箔したる、されたる下簾など懸けて入れさせたまふ。納殿、贄殿の魚、鳥、果物など、よきに選らせて、炭、油など、長櫃に積ませたまひて、御文、（消息）一日は、見たまへしに、目もくれて、もの覚えざりしかばなむ、え聞こえざりし。（略）（歌）天雲は（略）さて、この米は、夏衣にや。「単衣なるしも」とかいふなれば、今よりだに。とて奉りたまへれば、（「蔵開　下」、五七〇頁）〈兼雅から中の君への消息。〉

（66）東宮は、白銀、黄金の結びものどもこぼたせたまひて、ほかなる竹原にして、下には白銀の細皮結び、餌袋のやうにして、黒方を土にて、沈の笋間もなく植ゑさせたまひて、節ごとに水銀の露据ゑさせて、藤壺に奉らせたまふ。（消息）昨日、一昨日は、物忌にてなむ。（略）さてこれは、小さき人々に持たせたまへとてなむ。（「国譲　上」、七〇頁）〈東宮から藤壺への消息。〉

（67）御返りは、（消息）承りぬ。賜はらせたる人の御文は、げにさも思すべきことにこそは。（略）さてこれは、（歌）きぬぎぬの（略）露は、これにはそれをのみなむ、明け暮れ。（歌）呉竹の（「国譲　上」、七一頁）〈あて宮から東宮への消息（返事）。〉

（68）宮より、よきほどなる白銀、黄金の橘一餌袋、黄ばみたる色紙一重覆ひて、龍胆の組して結ひて、八重山吹の作り花につけてあり。御文には、（消息）おぼつかなからぬほどに、と思うたまへど、（略）さてこれは、幼き人々に。（「国譲　中」、一四八頁）〈東宮から藤壺への消息。〉

（69）蔵人の少将、「おはせや、君たち。さるべからむ人に橘食はせむ」とて、手ごとに君だちもてあそびたまふ。御返りは、（消息）日ごろ訪はせたまはざりつれば、（略）さて、これはさしも承らぬものを。（歌）みにもかく（「国譲　中」、一四九頁）〈藤壺から東宮への消息（返事）。〉

（70）産養したまはぬ人なく、いと清らにしたまふ。宮より、七日のは、御屏風、御座よりはじめたまひて、長持の脚つきたる三つ、唐櫃五具に、綾、錦よりはじめて、よろづの物入れさせたまへり。御文あり。（略）（消息）度々のは見たまへき。（略）さてこれは、旅人の料にとて。（「国譲　中」、一五

三頁）〈東宮から藤壺への消息。〉

（71）魚、苞苴、人の奉りたらむ、多くあり。おとどの、かかる折の料とて、鮎かがりいとをかしげに作り置かせたまへり。それ取り出でさせたまひて、苞苴添へつつ、梨壺、宮の御方、中の君に奉らせたまふ。（消息）まだ大将の悩ましくしたまふに、（略）さてこれは乳母たちの料に。（「国譲　中」、一九八頁）〈兼雅から梨壺への消息。〉

（72）魚、苞苴、人の奉りたらむ、多くあり。おとどの、かかる折の料とて、鮎かがりいとをかしげに作り置かせたまへり。それ取り出でさせたまひて、苞苴添へつつ、梨壺、宮の御方、中の君に奉らせたまふ。（略）中の君の御もとには、（消息）日ごろはいかでとなむ。（略）さて、これは桂の御荘の手づから取りて侍りつる。（「国譲　中」、一九八頁）〈兼雅から故式部卿の宮の中の君への消息。〉

（73）宰相の中将の君の御もとより、二の宮の乳母のもとに、女の装ひ一領、白張の一重襲包みて、御文あり。（消息）昨日のつとめて、消息聞こえたりしかど、急ぎて出でたまひにければ。（略）さて、これはいと暑き日なめるを、脱ぎかへたまへ。（「国譲　中」、二一一頁）〈宰相中将祐澄から女二の宮の乳母への消息。〉

（74）左の大殿より、よい蜜、瓜、焼米、生海松、水蕗など奉れたまへり。北の方の御もとに御文あり。（消息）一日参りたりしかど、出で立ちしたりしなどありしかば、わづらはしさになむ、急ぎ。さて、海松はた人のもとにとて。（歌）わたつ海の（「国譲　中」、二四一頁）〈左大臣正頼から中納言実忠の妻への消息。〉

（75）宮司なさるるほどに、大将殿より、人のなるべき、御文してあり。見たまへば、（消息）日ごろ、宮に度々参れど、（略）さて、年ごろあひ顧みるべき者の侍るを、（「国譲　下」、三二八頁）〈右大将仲忠から藤壺への消息。〉

（76）「尾張より奉りし唐櫃あらば、入り物ながらやよからむ」とて召し出でたり。片つ方に、絹二十疋、綾十疋、今一つ方には、尚侍、「ここに物入れむ」とて、のたまひて、掻練の綾の衣一襲、薄色の織物の細長、袴一具、山吹の綾の三重襲、人に賜はむとて、斑絹と入れたまふ。御文は、（消息）あさましう、年ごろになりにけり。（略）さてこれは、ただ今人のものしたまふめる。何にかあらむ。（「楼の上　上」、四一八頁）〈右大臣兼雅から宰相の上への消息。〉

［対話文・文頭の例］

（77）尋ねおはするに、見つけて、「さて、いかがありつる」とのたまへば、「尋ね得べくもあらず。」（「俊蔭」、九五頁）〈忠雅から兼雅に琴の音についての問いかけ。〉

（78）「この春子一人なして隠れましにき。童べをぞとりてはべる。さて国王に奉るべしと聞くは、なんでふことぞ。」（「藤

原の君」、一九五頁）〈滋野真菅から殿守にあて宮のことについての問いかけと非難。〉

(79)「そのふみども、いとものの不便なりき」と申したまふ。「さてその日、不意に人に騒がれたてまつりき」。（「嵯峨の院」、三一二頁）〈中納言平正明から左大将源正頼への報告。〉

(80)「いぬを見たてまつらざらむことのおぼつかなかるべきをなむ。さてこの宮を、殿の御方に渡したてまつらむとすれども、思ふ心ありてなむ。」（「国譲　上」、一一二頁）〈仁寿殿の女御から女一の宮に、女二の宮のことについての言及。〉

(81)「もの習ひたまはむほども、聞かまほしきものかな。夜習ひたまはむほども」。「易きこと。さて、御姫君には、何をかは教ふる」。（「楼の上　下」、五三五頁）〈仲忠から涼への問いかけ。〉

(82)「むかしのものの声の、さもあはれにめづらしく聞きはべりつるかな。大将も、御楽の声も、あはれに愛しうなむ。さて、今日門に参らむ人、必ず召し入れて見たまふべき人なり」と、治部卿の御声なり。（「楼の上　下」、五五三頁）〈夢の中での、故俊蔭から娘の尚侍への言葉。〉

上記より、［消息文・文頭］の（59）から（76）の例は、全十八例中、十六例までが、消息に贈り物（(60)は消息と歌、(65)、(67)は消息と歌と贈り物）が付いており（贈り物が付いていない残りの二例は、もらっていた消息の返信の一例(62)、任官の推挙の消息の一例（75）、そのうち、(59)、(61)、(62)、(63)、(66)、(67)、(68)、(69)、(70)、(71)、(72)、(73)、(76)の十三の例は「さて（この）名詞《名詞は贈り物自体を表す炭、米などといった実質名詞》」という形式で始まる、それまでの話題から、消息の出し手から受け手及び受け手の周辺に侍する者たちへの何らかの贈り物について消息の中で述べる部分となっている。その贈り物自体についてこの「サテ」の前部で述べた部分は消息の中で見当たらず、つまり、そこで話題が、ある話題から贈り物についての話題に転換しているといえる。また［対話文・文頭］の（77）から（82）の六例も「サテ」の前後で話の場は同様に転換している。

この項では『うつほ物語』を参考資料とし、中古の資料である『うつほ物語』では「転換のサテ」が消息文でも見られることを確認した。

## 二．三．三．『転換のサテ』から接続詞サテへ

前々項二．三．一．では『転換のサテ』が中世の対話文において発達したことを確認した。また、前項二．三．二．では『転換のサテ』が中古の『うつほ物語』の消息文に既にまとまった数が見られたことを述べた。

ここではこの［消息文・文頭］の例に特に注目することで、記述文である消息文と、口頭表現である対話文という出現環

境が異なる文に、なぜ「転換のサテ」が現れることが出来たのかを考えてみたい。

消息というのは限られた空間でその出し手と受け手が判然とした、一方向性の下で行われる書記言語による伝達活動である。消息の紙面はその性質上当然有限であり、消息の出し手は様々な話題をその限られた紙面に収まるように受け手に対して示す必要が生じる。また、その消息の中でどれほど話題変更があってもそれが同一の消息の中での記述であれば「当該の書き手から当該の受け手への伝達内容である」ということが、その伝達内容が消息という媒体に記されていることにより保証されている。つまり、消息文は消息の出し手から受け手への伝達内容を記述した文であり、また一方、対話文は口頭表現によって話し手から聞き手に伝達内容を伝える文である。この点で、消息文と対話文は共に、発し手から受け手に伝達内容を伝える文、伝達文としてその機能に共通性が見られると考えられる。

またその文体においても、特に中古散文作品の消息文の場合、

(83) 北の方、大宮の御返り聞こえたまふ。（消息）かしこまりて承りぬ。（『うつほ物語』「蔵開　上」、三九三頁）〈俊蔭女である北の方から大宮への、消息の返事。〉

(84) あこぎがもとに、少将の御文あり。（消息）いかに。その部屋はあくやと、いみじくなむ。（『落窪物語』巻之一、一三頁）〈少将からあこぎへの消息。〉

(85) まだいと深き朝に御文あり。例の、うはべはけざやかなる立文にて、（歌）「いたづらに分けつる道の露しげみむかしおぼゆる秋の空かな（消息）御気色の心憂さは、ことわり知らぬつらさのみなん。聞こえさせむ方なく」とあり。御返しなからむも、人の、例ならず見咎むべきを、いと苦しければ、（消息）「うけたまはりぬ。いとなやましくて、え聞こえさせず」とばかり書きつけたまへるを、（『源氏物語』「宿木」四三一頁）〈薫から中の君への消息と、それを受けての中の君から薫への返事の消息。〉

のように、その内容のみならず書きぶり自体が対話文と酷似しており（＝部参照）、消息文と対話文の文体の差が現代語のそれらよりも非常に小さかったと思われる。[3]

このような、伝達文としての機能の共通性と文体の類似性から、特に古典語の消息文と対話文の間には互換的な関係があった可能性を考えても良いかと思われ、よって記述文である消息文と口頭表現である対話文という出現環境が異なる文に、共に「転換のサテ」が現れることが出来、この、消息文と対話文の間に互換性が認められることからそれが下地となって、中古、中世では対話文、消息文で主に用いられていた『転換のサテ』が接続詞のサテとして近世以降は見られるようになったと考えられる。[4]

次に、なぜ「サテ」が指示する具体的な意味内容が「サテ」

の前部に見られないところで、『転換のサテ』によって文どうしの関係付けを行うことができるのかについて考えてみたい。

本発表の二．二．項から論じてきたように、「サテ」は指示副詞「サ」が指示する具体的な内容が「サテ」の前部に見られる例（①）と、見られない例（②）がある。そのうち、「サテ」が文中に置かれて副詞としてはたらく例（①—A．の例）と、文頭に置かれて副詞としてはたらく例（①—B１．の例）、『転換のサテ』としてはたらく例（②—A．の例）を用例を挙げて観察すると、（①—A．の例）、（①—B１．の例）、（②—A．の例）の順に「サテ」の「サ」の指示詞としての概念的な意味（語彙的意味）が消失していることが分かる。

・（①—A．の例）

（5）〈再掲〉「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」（『枕草子』第二七四段、四二五頁）

（6）〈再掲〉さて少将わ今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども、都に待つ人どもも、心もとなうござらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者にいとまごいをして、泣く泣くそこをたたれた．草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：されどもさてあらうずることでなければ、そこをたって同じ三月の十九日に少将わ鳥羽え明かうつかれた．（『天草版平家物語』巻第一・第十一、七九頁）

・（①—B１．の例）

（7）〈再掲〉「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」（『落窪物語』巻之一、九三頁）

（8）〈再掲〉「此神輿かきかへし奉れや」と僉議しければ、数千人の大衆、先陣より後陣まで、皆、尤々とぞ同じける。さて神輿を先立て参らせて、東の陣頭、待賢門より入れ奉らむとしければ、（『平家物語』覚一本、巻第一・神輿振、八七頁）

・（②—A．の例）

（11）〈再掲〉女、（歌）なぎさなる袖まで潮は満ち来とも葦火たく屋しあれば干ぬらむ　などなむ、いひおこせたりける。さりければ、久しくも長居で、帰り来にけり。〈ここまで三五段。〉さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。（『平中物語』三六段、五二二頁〈これは三六段の冒頭に置かれた「サテ」の例。〉）

（12）〈再掲〉「侍共に矢一つ射かけ候はん」と申しければ、「年

来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扨小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。（『平家物語』覚一本、巻第七・一門都落、八三頁）

以上（5）から（12）の用例を見ると、「サテ」の「サ」の概念的な意味（語彙的意味）は段階的に消失し、「意味の漂白化」[5]が起こっていることが見てとれる。（5）、（6）では文中の、（7）、（8）では文頭の「サテ」の前文までに「サテ」の「サ」が指示する具体的な内容が語的要素として現れている（〰部）のが、（11）、（12）では「サテ」の前文までに「サ」が指示する具体的な内容が語的要素としては現れず、この（11）、（12）の「サテ」は「サテ」が置かれているその前後文を関係付け、文と文との結束性を示すという機能的なはたらきをしている。この「サテ」の機能の変化は「サテ」が「再分析」[6]されたことを示していると考えられ、これは、前述の「サテ」の「意味の漂白化」と共に「サテ」の「文法化」[7]の証左であると思われる。『転換のサテ』の場合、元来は副詞として概念的な語彙的意味を持ってはたらいていた語「サテ」が「意味の漂白化」によってその語彙的意味を消失し、代わって文法的機能をもってはたらく語「サテ」となったという経緯が用例から辿れると思われる。そして、この「サテ」の文法化による副詞から『転換のサテ』、つまりは接続詞の「サテ」に向かうものとしてのその変化は、「サテ」の語用論的な拡張だと考えられ、これは「主観化」[8]による変化であると説明することができ、それを引き起こす原因は「サテ」を使う話し手の推論であると考えられる。

以上により、本論の用例によって示した『転換のサテ』は接続詞の「サテ」に向かうものとして考えてよいかと思われるが、その発達は中世後期から次代の近世にかけてであると予測される。その詳細については稿を改めたい。

## 三．まとめ

本発表では「サテ」の前部に「サテ」が指示する具体的な内容が見られない、その前後部で話題が変わる位置に現れる「サテ」に注目してこのような用法を持つ「サテ」を『差し込みのサテ』と名付けた。この『差し込みのサテ』は接続詞的用法を以てはたらくものと、感動詞的用法を以てはたらくものとがあるが、本論では『差し込みのサテ』のうち前者の、その前後部の関係付けを行うことで接続詞的用法を以てはたらく「サテ」を『転換のサテ』として取り上げ、そのような『転換のサテ』が古典散文作品中において、その前部までの文の内容を承けつつ、文脈を一旦切り、新たな物語、章段、話題などの始まりを示し、話の場を転換させる機能を以てはたらくこと、用例の状況より対話文、消息文から生じたと見

られることを述べた。また、対話文から生じたと考えられる『転換のサテ』が既に中古の資料（『うつほ物語』）の消息文にも見られることについては、対話文と消息文の、伝達文としての機能の共通性と文体の類似性から、特に古典語の消息文と対話文の間には互換的な関係があった可能性を考えることで説明されるとした。

さらに、『うつほ物語』中の消息文に『転換のサテ』の用例がまとまって見られることについて、消息文は、「消息」という書き手と読み手が確定しており物理的に制限のある空間に記述される文であることから、限られた空間（消息の書面）に複数の話題について連続する形で文を書き連ねる必要があることから生じた可能性を述べた。

また、副詞的用法から接続詞的用法の「サテ」の用法の変化については「サテ」の再分析の結果と考え、「サテ」の「意味の漂白化」と共に「サテ」の文法化によるものとし、『転換のサテ』が接続詞の「サテ」に向かうものであると考えられることを述べた。

（注）

（1）この「場」は高橋（一九五六）〈後に金水敏・田窪行則編（一九九二a）に再録。〉による。

（2）百瀬（二〇一八b）

（3）橘豊（一九九八）『手紙文の国語学的研究』には、「この時代〈論者注：中古を指す。〉のかなの手紙を今日に伝える材料として、物語や説話に掲載された手紙が挙げられる。」として、『源氏物語』中の「宿木」で薫が中の君からもらった手紙の返信を挙げ、「かな文であるから、敬意・丁寧の意を表す「侍り」や「給ふ」が頻繁に用いられているのは当然であると言える。その他、「うけ給はりぬ」は、「お手紙頂戴致しました」の意で、ほとんど今日の「拝復」と同じ」（同・41頁）とあり、中古の消息文が今日の手紙文と同じように、消息の発し手が消息の受け手に話すようにその内容を記述したことが述べられている。

（4）近世期に成立した資料における、全「サテ」の用例数にしめる、②―A．の用例数と、その割合を示す。

・『武道伝来記』（一六八七）8（地の文5＋対話文3）／23＝約34．8％。

・『雨月物語』（一七七六）2（地の文1＋対話文1）／5＝40．0％。

・『春雨物語』（一八〇八）11（地の文9＋対話文2）／19＝57．9％。

であり、近世期には『転換のサテ』は中古、中世期より発達したと見ることが出来ると思われる。

（5）「意味の漂白化」(bleaching)は「「脱意味化」(desematicization)とも言われ、実質的意味内容、概念的意味の消失として捉えられている。」とする。（Traugott（2011）「文法化と（間）主観化」62頁、（福元広二訳）『シリーズ言語学フロンティア03　歴史語用論入門』大修館書店

（6）「再分析」は「隣接するいくつかの構成素の文法構造を、その語順を変えることなく別の構造に変えること」とする。（Traugott（2011）「文法化と（間）主観化」60頁、（福元広二訳）『シリーズ言語学フロンティア03　歴史語用論入門』大修館書

店

（7）「文法化とは、文法的要素が（史的に）発達して、関連する一連の機能的・語用論的・意味的・形態統語的・音韻的変化が生じることと捉えることができる。」とする。（Traugott（2011）「文法化と（間）主観化」59頁、（福元広二訳）『シリーズ言語学フロンティア03　歴史語用論入門』大修館書店

（8）「主観化は、表現の概念内容に変化が生じたり、態度や信条をコード化し調節するために意味が加えられたりするのに伴って起こるものである。それは、人びとの相互作用のプロセスから生じる意味変化である。」（Traugott（2011）「文法化と（間）主観化」65頁、（福元広二訳）『シリーズ言語学フロンティア03　歴史語用論入門』大修館書店

| 資料名 | 消息文中での贈り物についての言及部分の数／消息文数 |
|---|---|
| 『大和物語』 | 1／19 |
| 『平中物語』 | 0／8 |
| 『落窪物語』 | 12／57 |
| 『枕草子』 | 7／28 |
| 『源氏物語』 | 55／672 |
| 『堤中納言物語』 | 0／8 |
| 『浜松中納言物語』 | 4／28 |

（補注）『うつほ物語』以外の本発表で扱った古典散文作品中に現れた消息文数と、その中で贈り物についての言及があった部分の数を以下に示す。

※1上記表については、伊原（一九六五）「物語における色紙と文付枝の配色―特に源氏物語について―」、田中（一九八八）「源氏物語の手紙―数と形と―」を参考にして、論者自身が調査した内容を加えたものである。

※2消息文は、具体的に消息文の文面が記述されていない、「京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。」（『伊勢物語』第九段、一二一頁）などについても数えている。

上記表について、その総数は、79／820で、消息文のうち、贈り物についての言及部分があるものは、消息文全体のうちの約9．6％となっている。

しかし、上記表中の消息文には『転換のサテ』の用例は見られない。これは、上記表に挙げた資料には、『うつほ物語』の消息文のような、消息文の文面自体についての記述部分自体がなく、※で挙げたような、「文を書いた」旨の記述が地の文などで確認できるのみであることにもよると思われる。

（参考文献）

糸井通浩（一九八七）「中古文学と接続語―「かくて」「さて」を中心に―」『日本語学』第六巻第九号、明治書院、八四―九四頁

伊原昭（一九六五）「物語における色紙と文付枝の配色―特に源氏物語について―」『季刊文学・語学』第三七号、全国大学国語国文学会編、三省堂、五八―七一頁
岡崎友子（二〇〇二）「指示副詞の歴史的変化について―サ系列・ソ系を中心に―」『国語学』第五三巻第三号、（二一〇）、国語学会、一―一七頁
岡崎友子（二〇〇六）「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について―ソ系（ソ・サ系列）指示詞再考―」『日本語の研究』第二巻第二号、日本語学会、七七―九一頁
岡崎友子（二〇〇八）「指示語「サテ」の歴史的用法と変化について―『源氏物語』を中心に―」『国語語彙史の研究』二十七、国語語彙史研究会編
岡崎友子（二〇一一）「指示詞系接続語の歴史的変化―中古の「カクテ・サテ」を中心に―」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編　くろしお出版、六七―八七頁
小野寺典子（二〇一一）「談話標識（ディスコースマーカー）の歴史的発達　英日語に見られる（間）主観化」『シリーズ言語学フロンティア03　歴史語用論入門』大修館書店、七三―九〇頁
金水敏・田窪行則編（一九九二a）『指示詞』日本語研究資料集：第1期第7巻、ひつじ書房
甲田直美（1995）「転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐって」『日本語と日本文学』21、筑波大学日本語日本文学会編、三一―四二頁
高橋太郎（一九五六）「「場面」と「場」」『国語国文』二五（九）、五九一―五九九頁〈後に金水敏・田窪行則編（一九九二a）『指示詞』日本語研究資料集：第1期第7巻、ひつじ書房、三八―四六頁に再録。〉
田窪行則・金水敏（一九九六）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』vol.3, No.3, 日本認知科学会、五九―七四頁
橘豊（一九九八）『手紙文の国語学的研究』風間書房
田中仁（一九八八）「源氏物語の手紙―数と形と―」『親和女子大学研究論叢』21、親和女子大学、三九―一一七頁
Traugott, Elizabeth Closs（一九九五）The Role of the Development of Discourse Markers in a Theory of Grammaticalization Paper presented at ICHL XII, Manchester 1995; Version of 11/97 1―23 頁（http://www.stanfordedu/～traugott/ect -papersonline.html より2018年12月28日閲覧。）
Traugott, Elizabeth Closs（二〇一一）「文法化と（間）主観化」（福元広二訳）『シリーズ言語学フロンティア03　歴史語用論入門』大修館書店、五九―七〇頁
坪井暢子（一九九一）「源氏物語の消息文に関する一考察」『人間文化研究年報』第15号、お茶の水女子大学人間文化研究科、五三―六四頁
中野幸一（一九八一）『うつほ物語の研究』武蔵野書院
西田隆政（二〇〇一）「源氏物語における指示語「さて」の用法―平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって―」『国語語彙史の研究』二十、国語語彙史研究会、和泉書院、一二七―一三九頁
長谷川哲子（二〇〇〇）「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』105号、日本語教育学会、二一―30頁
浜田麻里（一九九五a）「いわゆる添加の接続語について」『複文の

研究（下）』仁田義雄編、くろしお出版、四三九―四六一頁
浜田麻里（一九九五b）「サテ、デハ、シカシ、トコロデ―転換の接続詞―」『日本語類義表現の文法（下）　複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編、くろしお出版、六〇〇―六〇七頁
藤井俊博（二〇〇三）『今昔物語集の表現形成』研究叢書三〇六、和泉書院
藤井俊博（二〇一六）『院政鎌倉期説話の文章文体研究』研究叢書四六八、和泉書院
藤本真理子（二〇〇八）「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』九〇輯、大阪大学国語国文学会、四〇―五三頁
百瀬みのり（二〇一八）「中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立―前文脈を踏まえない「サテ」について―」『詞林』第六十四号、大阪大学古代中世文学研究会、四七―六二頁

［用例採集資料］
・『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』、『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『落窪物語』、『堤中納言物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『浜松中納言物語』、『住吉物語』『とりかへばや物語』、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『狂言集』以上全て『新編日本古典文学全集』（小学館刊行）に依った。
・『天草版平家物語』　江口正弘著（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院）
・検索サイトジャパンナレッジ http://japanknowledge.com/
・国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CHJ）』（コーパス検索アプリケーション『中納言』）
https://chunagon.ninjal.ac.jp/
（最終アクセス日　共に二〇一九年一月二五日）

（ももせ・みのり　本学大学院博士後期課程）